

青森県八戸～岩手県二戸

是川縄文館+ α の旅

本間一恵



八戸市縄文文化財センター是川縄文館で2024年7月13日から9月8日に開催された「縄文の編組の探求」という展覧会を目的に、一泊二日の旅に出た。

展覧会のイベントとして企画されていた、佐々木由香さんのレクチャーを目指して計画を立てたのだが、この日程なら台風も通り過ぎてはいるはず、という思惑はすっかり外れて、ハラハラしたはじまり方だった。

令和3年に世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」に含まれる是川石器時代遺跡は、縄文時代前期から晩期までの集落跡で、約5,000年にわたる人々の暮らしの痕跡が残されている。

中でも晩期の中居遺跡は、縄文時代の文化の成熟した姿を現代に伝えているといわれる。一番有名なのは、なんといっても国宝になっている合掌土偶だろう。展示館でも特別な一室に照明を受けて一点だけで鎮座している。しかしそれにも増して、かご作りの我々にとっては、籃胎漆器の出土遺跡としての存在感が大きい。

籃胎漆器とは籠に漆を塗った器を意味する言葉である。現在も伝統工芸品として作られている。主な生産地は福岡県の久留米市なのだが、需要の落ち込みと共に撤退が進み、残っている業者が2つだけになった、という新聞記事をつい最近目にした。下地の編目が浮き出た、黒と赤のお盆など、以前は引き出物としてよく使われていたので、持っている家庭も多かったと思う。

この籃胎漆器という呼び名は、海外で万国博覧会が盛んだった明治期に生まれた新しい名称だと聞いたことがあった。改めて調べてみたら、古くからの業者のHPに記載があった。それによれば、籃胎漆器は1895年に名付けられたとある。そして、1904年のセントルイス万博で受賞した。「籃」(らん)は、かごとも読める。かごと読む字は、漢字検定2級の「籠」、準一級の「籠」くらいしか思い浮かばないが、一級にはこの「籃」の字をはじめ他にも6つほどあるそうだ。名付け親が当時の農商務次官と台湾総督ということなので、耳慣れない籃胎の文字になんとなく納得。ともかく、是川遺跡の発掘が始まった大正期には、すでに存在していた名称だったから、呼び名に困ることはなかったのだろう。

是川縄文館には、一度来たことがある。たまたま八戸の駅で時間が余って、観光センターで周りを探したら来られる範囲にこれがあった。是川の名前は知っていたが、このあたりという場所のイメージはなかったので、偶然の出会いみたいなものだった。

最初に発掘を始めた兄弟の銅像が入り口に置か

れていたことと、赤と黒を基調にしたスタイリッシュな展示室が印象的だった。まだ開館した翌年ぐらいだったようで、周りの様子は今とは少し違う感じだったが、買って来た発掘道具がプリントされた手ぬぐいは、だいぶ色あせたが今も現役である。

今回は特別展で、3年間にわたる共同研究で明らかになった縄文時代の編み組みの研究が紹介されている。見どころは、超精密に編まれた籠と漆で覆われた籃胎漆器の数々。中居遺跡関連の展示のほかにも、各地で復元された縄文のかごが集められていた。高宮紀子さんと一緒にかかわった復元かごが、いくつも展示されていて感慨深い。

八戸駅でのバスの待ち時間を考えていなかったもので、レクチャーの時間にほぼ滑り込み状態で到着。100名の定員は予約で満席になりキャンセル待ちもいた模様。九州から復元つながりのメンバーが来ていたり、岐阜からの参加者がいたり、高宮さんも来ていたし、遠くから駆けつけた人も。そうは言っても、予約した100名の大多数は地元の方たちだろうから、多くの人が縄文の編組に興味を示してくれたのだと嬉しく思う。

現在金沢大学に籍を置く佐々木由香さんは、今回の復元プロジェクトを中心に、縄文時代の編み組みのトピックを中居遺跡、その他、まだ公開前の最新情報込みでレクチャーしてくれた。

遺跡からの発掘品の研究は、植物種の同定方法の進化やX線CT画像による構造解析など、最新科学技術によって新しくわかってきたことも多い。鳥浜貝塚と是川遺跡ぐらいしか思い浮かばなかったのは昔の話となり、植物繊維製品は次々に発見されるようになってきて、現在では全国で120遺跡から出ているという。素材が判明した遺跡は半数弱とのこと。

一般的には触れる機会がなかったであろう縄文時代の編み組みに関する知見が、みっちりと言

込まれたスライドレクチャーだった。そして、この何十年かで急に進んだ研究は、これからも次の段階を見据えて進んでいこうという決意を感じるものだった。

まだゆっくり見ていたいと思いつつ、会場を後にして、KEIANの堀恵栄子さんと籃胎漆器の籠を復元した柴田恵さんの車に便乗させてもらい二戸へ向かう。(この二人については一つ前のバスケットリーニュース掲載記事に詳しい。)

1時間半くらいと聞いていたドライブは、しゃべり続けていたのであつという間だった。運転しながら柴田さんが、この3人でこの道を通るとは思いもしなかった、と感慨深げに言った。たしかにその通りである。スズタケ細工の柴田さんの名前はずっと前から知っていたが、はじめて言葉を交わしたのはつい最近、今年の5月、KEIANギャラリーでのことだ。その後も話す機会があつて、急激に近い存在となった。

その日は、地元の人たちの利用も多い温泉施設金田一温泉カダルテラスの宿泊施設に泊まる。室内の半分は靴を脱いで上がる一段高くなったフローリング床でそこに低いベッドがあるという洋室のような和室のような部屋だ。窓の下には隣の公園の2.5メートルプールがまぶしく光る。今どき、「4」「9」「13」という数字を律儀に避けた飛びっ飛びの部屋ナンバーには、ちょっと笑ってしまったが、居心地の良いスケール感の宿だった。

翌朝、今度は堀さんのレンタカーで柴田家へ。入口脇の超美味なミニトマトを味わいながら振り向くと、すぐ前が畑。といってもストーブ用の檜の薪が何年分かあちこちに積んであり、隅の方では百日草が思いっきり上を目指して背を伸ばし、自然に生えてきてしまったかぼちゃが小木を覆う、という感じ。もちろん、美味しそうな長ーい茄子もできているので、間違いなく畑。スズタケを編む仕事とうまくバランスをとっていくための大事なスペースらしい。自宅と繋がっている仕事場で

話を聞く。

籃胎漆器のかごの復元は、以前にも柴田さんが手掛けられていて、その時のかごも大変緻密なものである。樹脂包埋切片法という進化した方法で素材同定分析が進み、今も生産されているスズタケ細工の素材である可能性が高まった。そして今回、X線CT解析による解明がされた。CTとえば、病院が画像診断に使うあれと同じで、文化財の内部を破壊せずにデータが得られる。漆で覆われた籠が劣化で消失していても、その空洞部分が見ることが出来て、編組の様子が観察できる。

1689枚の画像解析で得られたデータは詳細に違いない。それをもとにした復元現場へのオーダーも精細だろうから、現実の手作業と間でせめぎあいになることは、間違いなからう。

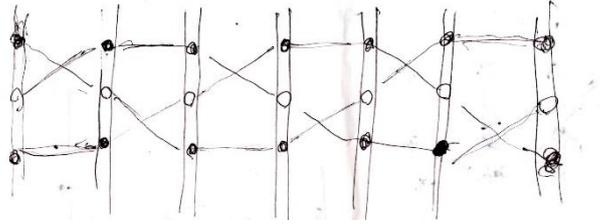
(それに比べれば私が今までかかわってきた復元は、かなりアバウトな現場で助かった。)

2本飛び網代で組んだ底は、立ち上がる時に裂いて0.8~3.5mm幅に。底の一辺が7-8センチの小さい籠なのに縦芯の合計はなんと248本。側面は3目飛びのゴザ目が次の段で2目ずれるという縄文のかごによくみられる編み方。そして縁に近いところに出てきたのが、青海編み! この名称は竹細工の世界で呼ばれているもので、三つ編みのように3本が動いていく編み方である。

6月、世田谷美術館の民藝展で実演した柴田さんが、帰りの新幹線に乗る前の時間、東京駅の待合スペースで長話をした。7月の展覧会が迫っているのに、この青海編み部分はこれからとのことだった。スズタケ細工にこの編み方はないので、簡単にオーダーされても困るというのは当然だ。

私もすぐには編めないだろうなと思い、竹細工の資料集を引っ張り出してみた。青海編みもそれに近い松葉編みも出ているが、この図解じゃわからない。不親切だよなあ、と改めて自分なりの解釈をしたメモを書くことで理解した。これがあればまたすぐに思い出して編めるだろう。

こんなメモです。



それに対して、柴田さんは、手でわかるようになったという。超拡大した図をもらっても、竹細工資料集を見てもわからない。締め切りも迫り、今日中に出来るようにならなかつたらどうしよう、というところまで追い詰められたらしい。結局、マーカーでの色分けと、資料集の説明文中の言葉「はねあげて」がきっかけで、手が理解したという。



復元が終わってからも、間違えながらしばらく試していると手が思い出してくるという。隣で聞いていた堀さんは、理論派と実践派だね、と面白がっていたが、いつまでも止まらないかご談義の二人を残して次の予定に向けて出発していった。

仕事場には、主に制作されている斜め組のかご、蓋付長方形の弁当箱型の編みかけが並んでいた。復元の籠は底を四角く組んで立ち上げる縦芯タイプの籠だし、材の幅も比べようがなく精緻だから、職人としてかかわってきたものとは別物だ。真竹で作られる現在の籃胎漆器は皮でなく身の部分だけ使うから、表面はつるつるしていないが、スズ

タケに漆をかけるためには、丸のままの状態に紙やすりをかける工程が必要だったようだ。紙やすりはなかっただろうけど、木賊かなとか、なんでこんなに細かく編む必要があるのだろう、漆との接合がいいのかな、とか。どうせ見えなくなってしまうのになんで青海編み?とか、話は尽きない。縄文の技はすごい、という意見は初めから一致していたけれど、あらためて参りましたという感じ。

弁当箱のカドの作り方の途中段階がわかる編みかけ(写真中)や、叔父の春男さんの作った籠(写真下)、地元の民具など見ているうちに、気が付いたら、ずいぶん時間がたっていた。以前、堀さんから、「私は同世代の籠仲間っていうか、友達がいないので、本間さんのような方と知り合えて嬉しいです」と柴田さんが話していた、と聞いていたので、こちらとしても安心して時間を割いていただいた。

二戸駅へ送ってもらう途中、スズタケ細工の販売や体験もできる「鳥越もみじ交遊舎」、ショールームに製品の並ぶ「浄法寺漆工房滴生舎」、御所野縄文博物館に連れて行ってくださった。もみじ交遊舎の裏手にある鳥越観音は、時間も体力も不足で登るのは無理で残念だった。漆の並ぶショールームは扉を開けたとたん空気感が全く違うのを二人で同時に感じた。御所野縄文博物館は、??????前に来たことあるはずなのだがなあ、と不思議に思いながら、昨日のスライドレクチャーの中で聞いた進行中の縄プロジェクトの片鱗を見せていただく。印象的な屋外の長い渡り廊下のアプローチ、インパクトのある展示スペース、なのに来た覚えがない!あの記憶は何だったのだ?別の博物館だったか?

なんとも快適な楽しい旅だった。ただ、東京への新幹線は盛岡からデッキで立って帰ることに。私の不注意の積み重ねの結果であるから仕方ない。でも仙台まではすぐだったし、そのあとも、台風がまだ影響を残していたせいも、多彩な雲と光と青空、時に雨という、千変万化の天体ショーを飽

きることなく眺めているうちに到着。席で居眠りしているより得した気分。最後にへまをしたおかげで、行き当たりばったりでドンくさい私らしいいつもの旅に戻ったような気がした。

追記：御所野の件は、私がボケたわけではなく、完全リニューアルされたより前に行きたらしい。2008年の企画展の図録が出てきたので、記憶違いではなかった!

今回の展覧会カタログは2000円。

是川縄文館 <https://www.korekawa-jomon.jp/>



八戸市埋蔵文化財センター
 Korekawa Archaeological Institution

是川縄文館

<https://www.korekawa-jomon.jp>



国宝「合掌土偶」風張1遺跡出土
 縄文時代後期後半 高さ19.8cm

国宝
 合掌土偶
 Gassyo Dogu

八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館
 Korekawa Archaeological Institution

催し物のご案内 2024.4-2025.3
 Exhibitions and Events



unesco
 World Heritage Site
 北海道・北東北の縄文遺跡群

縄文
 JOMON JAPAN

重要文化財「籃胎漆器」 中居遺跡 縄文時代晩期 当館蔵



POST CARD



「復元かご」 2024年制作
 素材:スズタケ 復元制作:柴田恵
 底:2本飛び網代 体部:3本飛びござ目、青海編み
 もじり編み 口縁部:矢筈巻縁
 現資料:籃胎漆器 縄文時代晩期前葉 高 8.4cm